

特集

虚血性眼疾患を考える

序 論

後藤 浩*

眼に限らず、循環障害は全身のあらゆる臓器にさまざまな器質的・機能的障害を引き起こす可能性がある。なかでも虚血性眼疾患はしばしば不可逆的な変化をもたらす、視力予後不良となることも多く、眼科医にとっては最も治療に難渋する病態のひとつであろう。網膜動脈の閉塞は網膜中心動脈閉塞症、網膜動脈分枝閉塞症、毛様網膜動脈閉塞症の3つに大別されるが、血管の閉塞部位によって予後が大きく異なってくる。津村先生にはこれらの病態と治療についてわかりやすく解説していただいた。

糖尿病網膜症の病期・病態の進行と網膜虚血には密接な関係がある。特に虚血に伴う HIF の活性化、さらには VEGF の発現亢進が大きく関与していることは周知のとおりである。VEGF は血管新生のみならず、血管透過性亢進作用によって黄斑浮腫の成因にも関わるということが明らかにされてきた。この VEGF を阻害する抗体の糖尿病網膜症における治療上の功罪についてはさまざまな議論があるが、少しずつ整理されてきた感がある。亀田先生と北野先生には、その歴史的背景も含めて解説していただいた。

眼虚血症候群の臨床像は急性期から慢性期に至るまできわめて多彩である。眼底におけるさまざまな変化に加え、血管新生緑内障による眼圧上昇に苦慮することあれば、眼圧はまったく問題な

いこともある。虹彩炎を生じることもある。眼科における治療は対症療法にとどまり、予後不良となることも少なくない。篠原先生にはそのあたりの現状について言及していただいた。

眼運動神経における栄養血管の虚血は外眼筋の麻痺を引き起こし、複視の原因となる。背景には高血圧や糖尿病を有していることが多く、日常臨床でもしばしば経験される。幸い、虚血性の外眼筋麻痺は自然軽快することが多いが、このカテゴリー自体は他の原因を否定した後の除外診断的な要素が強いため、必要に応じて頭部を含めた画像診断検査などが重要となってくる。畑先生には虚血による外眼筋麻痺について総論と各論を詳述していただいた。

虚血性視神経症は網膜中心動脈閉塞症同様、眼科受診時には絶望的な状況に陥っていることの多い厄介な疾患であるが、治療における考え方が異なる点からも動脈炎性と非動脈炎性とをしっかりと鑑別しておく必要がある。毛塚先生には最新の OCT angiography 所見も交えて解説していただいた。

これまで眼科における虚血性疾患、特に眼底や視神経(乳頭)の虚血性変化に対しては、その病態を捉える方法として検眼鏡の検査と、せいぜいフルオレセイン蛍光眼底造影くらいしかないのが現状であった。しかし、この特集を読んでいただいてわかるように OCT angiography, 超広角走査レーザー検眼鏡, レーザースペックルフローグラ

*Hiroshi GOTO 東京医科大学眼科学分野

フィ (LSFG) といった新たな画像検査機器が診断
や治療効果判定に大きな役割を果たす時代となっ

てきた。これらの検査方法の意義を含め、虚血性
眼疾患の理解と整理に役立てていただきたい。